

愛とか死という言葉から何を連想する？

愛……。

そして、死とは……。

両方とも、漠然としているものかもしれません。

あるいは、人によっては、それらについて、はっきりと自分の思いを持っておられるかもしれません。

世の中には、愛を語る小説、物語も、愛をテーマとした映画、演劇、歌なども数知れずあります。

古今東西、愛は、私達の永遠のテーマになってきたと思います。

愛とか死という言葉から何を連想する？

そして、一方、死についてはどうでしょうか。

あまり深く考えたくないという思いが強いのではないのでしょうか。

しかし、考えてみれば、私達は、一日一日、死に向かって生きています。

いつかは、私達は、みんな死んでいきますが、死を思つて、日々にちにちの生活を過ごしている人達は決して多くはありません。

明日をも知れない命の瀬戸際にある人達は、死に対して何らかの心の準備を整えているかもしれないかもしれませんが、それも死を達観するといふよりも、やはり死に対する恐怖の思いのほうが強いでしょう。

ましてや、年齢も若くて、身体からだも元気な人には、死はまだずっと先の話です。

自分のこととして実感が無いのは当たり前です。

しかし、今は、何が起こっても不思議ではない世の中になってきました。

まだずっと先の話だと思っても、死はある日突然やってくるかもしれません。

愛も死ぬも難しいテーマかもしれませんが。

一度、それらについて、あなたも考えてみる時間を持つてみてください。

日々の生活の時間は、慌ただしく流れているでしょうが、あなたの中にある時計の針を、少しゆっくりと動かして、思うところを考える

愛とか死という言葉から何を連想する？

とか、そのような時間と空間に、自分自身を誘われてはどうかでしょうか。

さて、あなたは、愛という言葉から何を連想されるでしょうか。また、死という言葉からはどうでしょうか。

以下の章より、私自身が、そういうものと関連して浮かび上がったきた思いを語ることにします。

## 男と女の愛

この世には、男の機能を備えた肉体と、女の機能を備えた肉体があります。

性同一性障害とかいうのもあって、なかなかややこしいですが、身体的特徴は、このふたつです。

その男と女、あるいは同性の間で、色々なパターンのドラマがあります。

形式は、夫婦、事実婚、不倫、同性愛と、様々です。

いわば、それぞれが愛の物語というものでしょうか。

いいえ、愛の物語というのは正しくないでしょう。

正しくは、愛憎の物語でしょう。

私は、そう思っています。

永久に君を愛す、誰よりも君を愛す、情熱的にあるいは静かに愛の時間を重ね、身体を重ねても、それだけでは、愛の物語が「憎」の時間になる、つまり、本当の意味で愛の物語となることは決してないと思います。

身体的に、精神的に、どんなに満足感があっても、そこに生じる愛には「憎」が付いて回ります。

愛しい、愛しているよ、ともに生きていこう、いい言葉のようですが、その裏側には、恐ろしいほどのエネルギーが隠されているの

ではないでしょうか。ご存じですか。

愛するがゆえに裏切りは絶対に許さない、愛するがゆえに愛する人も、そして、自分も追い詰めてしまう、愛深き人の心の底には、このようなエネルギーが渦巻いているかもしれません。

それらのエネルギーが、特異な形となって表面化して、男と女の修羅場があるのでしょうか。

人間の奥深くに眠っているエネルギーが、何かのきっかけで表に飛び出してくるのです。

愛を誓い合った成れの果ては、互いが互いを殺し合うほどのエネルギーで、自爆していくということだと思います。

人を愛した、心から愛した、だからこそ独占したいと、間違った

愛は、マイナスのエネルギーを、どんどん増幅させていくのではないのでしょうか。

独占したいという思いが、それを阻むものに対して、戦いのエネルギーを発していくのです。

私は、独占したいという思いは、寂しさから来るものだと思います。

人は、根源的な寂しさを抱えて存在しています。

だから、人の温もり、優しさ、癒しに心が惹かれるのです。

そして、悲劇が起こります。

裏切りは絶対に許さないと云うけれども、間違った愛は、必ず裏切っていくのです。



裏切っていくから、その愛は間違っていたと分かればいいのですが、誰も本当の愛が分からないから、愛を求めては裏切られ、そして、裏切られてもまた愛を求めていくのだと思います。

何度、修羅場を潜り抜けても、男は女を求め、女は男を求めています。本能的な欲求とソロバンを弾いて、それを繰り返していくのだと思います。

殺し文句に踊って、熱病にうなされて、気が付けば、泥沼の愛の中にはまっていた、その悲劇が始まっています。

泥沼の愛の中に、自ら入り込み、泥沼の中で、戦いを繰り広げていきます。

しかし、自分達のいるところが、泥沼であることに、なかなか気

付けないのです。

それが悲劇なのです。

泥沼の中にいることを知って、そこから這い出してくることを試みる、それをしていけば、「憎」の部分が、段々と小さくなっていくのだと思います。

さて、泥沼の中にいることを知って、そこから這い出してくることを試みるということですが、では、具体的にはどうすればいいのでしょうか。

もっと優しくなっていけばいいのでしょうか。

もっと、愛していけばいいのでしょうか。

いいえ、そのようなことができるはずがありません。

優しくなっただけが分らないからです。

人を愛することが分らないからです。

本当の優しさも温もりも知らない男と女は、互いが互いの寂しさを埋めてくれるようにと、貪欲に求めていきます。

求めた結果、エネルギーが強いほうが、弱いほうを飲み込んでいくのです。

心から愛した、死ぬほど愛した、誰よりも誰よりも愛した、そのような激しくて熱い二人だけの愛の世界なのに、なぜ、それが永遠に続かないのでしょうか。

それは、果たして、本当に愛の世界だったのでしょうか。

少し、局面を変えます。

夫婦の仲が睦まじく、契りの堅いことを四字熟語で、偕老同穴かいろうどうけつと言います。

偕老同穴かいろうどうけつ……、生きてはともに老い、そして、死んでは同じ墓に葬られる、それが夫婦仲睦まじき姿だそうです。

他に、比翼連理ひよくれんり、琴瑟相和きんしつあいわという四字熟語もあるようです。

世間では、仲睦まじき夫婦としてある姿も、本当の愛を忘れ去つた夫と妻、男と女が、本当の意味で、二人がひとつになるには、難しいものがあると思います。

いいえ、二人が真実を知らなければ、本当の意味で、二人はひとつになることはできないのです。

世間では、共白髪ともしらまでの睦まじき夫婦として通用しても、真実の世界には通用しないことを知っていかなければなりません。

腐れ縁というのが、ピツタリな夫婦、男と女の関係が数多くあるのが、現実の話だと思います。

今では、夫婦別寝とかいう言葉もあつて、付かず離れずが、いい関係を保っていくようですが、それも本当のところはどうなのでしょうか。